様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　５ 月 １１ 日現在

機関番号：１３９０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2020
課題番号：１８Ｋ００００６０

研究課題名（和文）新ニヤーヤ学派の言語理論におけるラグナータの革新性の研究

研究課題名（英文）A Study of Raghunatha's Novelty in Navya-nyaya Philosophy of Language

研究代表者
和田　壽弘（Wada, Toshihiro）

名古屋大学・人文学研究科・名誉教授

研究者番号：００２０１２６０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：　ガンゲーシャ（G：14世紀前半）によって確立された新ニヤーヤ学派の言語理論は、彼の主著への注釈という形で発展する。この主著に含まれる定動詞語尾論は意味論を広範に扱っているが、ラグナータ（R：16世紀前半）は独立の作品を著してGの説の修正を行った。その一例が定動詞語尾の意味である。Gは能動態では努力を、受動態では行為対象性をその意味としたが、Rは両態で共に努力とした。つまり意味の数を減らして、論理的簡潔性を求めた。この簡潔性こそが、Rが新たな理論を提示する際に最も重要視した観点である。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は、現在インドに生きている学問伝統としての新ニヤーヤ学派の言語論、特に意味論における分析方法や記述方法や、議論の根底にある原理を解明した。定動詞語尾を扱う文献に焦点を合わせたが、様々な文法要素に議論が及ぶために、語の意味とは何か、語の意味を確定するための原則はどのようなものか、という普遍的な問題へと我々は誘われる。ラグナータの主張は、意味論についての現代的な問いへの答えの１つの在り方を示している。

研究成果の概要（英文）：The theory of Navya-nyaya philosophy of language was established by Gangesa (G: 14th c.); it developed through commentaries on his Tattva-cinta-mani. The Verbal Suffix Chapter of this book deals with the meaning of finite verbal suffixes, and Raghunatha (R: 16th. c.) revised it. For instance, G allots effort to the suffix in the active voice and objectless to the suffix in the passive. R allots only one meaning, i.e., effort, to both voices. He reduces the number of the meanings and pursues parsimony. This is the most significant principle of R when he presents his views or compares them with others' views.

研究分野：印度哲学

キーワード：新ニヤーヤ学派　言語哲学　ガンゲーシャ　ラグナータ　Akhyatavada　定動詞語尾　意味論

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

(1)　新ニヤーヤ学派（新 N 学派）は 14 世紀にガンゲーシャ『タットヴァ・チンターマニ』（Tattva-cintāmaṇi：以下『真理宝珠』）によって体系が確立されて以来、その術語及び記述の方法はインド哲学のすべての学派に浸透していった。哲学以外の分野、例えば修辞学やダルマ文献においても注釈書を読む場合には、新 N 学派の術語の知識なくしては理解ができない。中世インド思想を研究するためには、この学派の研究は避けて通れない。中世以降のインドの哲学・思想・宗教に関わる文献の研究にとって、この学派は基礎学を提供すると言っても過言ではない。加えて、現代にまで繋がる数少ないインドの学問伝統であり、生きている。

　新 N 学派の研究はＳ・セン（1924）、Ｄ・インガールズ（1951）らを嚆矢とするが、彼らは論理学やそれに関わる術語の分析に力を注いだ。本研究者による新 N 学派研究もこの流れに含まれる。一方で、この学派の存在に関するカテゴリー論に関しては、Ｋ・ポッター（1957）が先鞭を付けた。言語論については、Ｂ・マティラル（1968）が否定辞の意味論を分析した。その後、新 N 学派研究の蓄積が進み状況は徐々に改善されてきたが、インド学の他の分野に比べて、学派自体の研究はもちろん、言語論の研究は相当遅れていることは否めない。

(2)　ガンゲーシャからラグナータへの言語論に関する流れを明らかにするために、『真理宝珠』第４部「言語部」「定動詞語尾章」（Ākhyāta-vāda）をすでに英訳・分析し終えていたので、ラグナータの同名ではあるが独立作品の『定動詞語尾論』（*Ākhyāta-vāda*）の英訳と分析を開始した。この『定動詞語尾論』で展開された議論は、ガンゲーシャの「定動詞語尾章」と同様に、発話を聞いてあるいは文字を読んでどのような理解が生ずるのかに基づいて、定動詞語尾の意味を決定しようというものである。中心は定動詞語尾であるが、実はそれ以外の文法要素の意味も議論対象とされているので、新 N 学派の言語理論全般に対する「導入」としての役割も果たし、我々は『定動詞語尾論』からこの学派の言語論の基本的立場が理解できる。

(3)　ラグナータの独立作品として重要なものは『範疇真実解明』（Padārtha-tattva-nirūpaṇa）、『否定辞論』（Nañ-vāda）、『定動詞語尾論』であるが、本研究で取り上げた『定動詞語尾論』については、未だ信頼に足る英訳がない。

２．研究の目的

　本研究では、ラグナータの『定動詞語尾論』のテキスト校訂を行って、研究に耐えうる信頼性を備えた英訳を作成し、英訳からだけでは議論内容を理解することがほとんど不可能であるために、分析を含めた解説を付す事を目指した。テキストの構造が複雑で、どこにラグナータの結論が表明されているのかが分かりにくい。この問題に答えるためにテキストを 11 の部分に分割するだけでなく、それらの内部もさらに細分化し、構造が分かるようにテキスト番号を付す。そして、ラグナータに先行するガンゲーシャの理論との比較を可能にするために、後者の「定動詞語尾章」の研究成果を取りまとめておくことも目指した。

３．研究の方法

(1)　ラグナータの『定動詞語尾論』の英訳・解説のために、(a)校訂テキストを作成して、これに基づく「正確な」英訳を目指すことはもちろんであるが、(b)術語の訳語には広く受け入れられてものを使用し、(c)訳が理解しやすいように、定評のある注釈書を参考にしながら十分な解説を付す。

(2)　(a)の校訂テキスト作成のために６刊本を入手したが、これらを比較した結果、その内の４本を用いれば本研究の目的を達成できると判断した。（B, T, S, S2 の４本：引用文献③参照）。また、諸注釈書に「保存」されている本文テキストも校訂作業の重要な手がかりとなる。(b)を達成するために、ポッターが編集した『インド哲学百科事典』第２巻と第６巻と第 13 巻を主に参照する。(c)を達成するために、『定動詞語尾論』に対する最古の注釈書であるラーマバドラ（1570 年頃）著『定動詞語尾論釈』（Ākhyāta-vāda-vyākhyā）と、新ニヤーヤ学の伝統の中で重要視されたマトゥラーナータ（1650 年頃）の注釈書『定動詞語尾論解明』（Ākhyāta-vāda-rahasya）とを主に参照して、本文の理解に有益な解説を作成する。

(3)　かつてガンゲーシャ著『真理宝珠』「定動詞語尾章」において提示された定動詞語尾の意味や、語意を決定する彼の一般原則について論攷を纏めたことがあった（引用文献①②）。これらに、本研究の成果を踏まえた上での改稿を施す。

４．研究成果

(1)　ラグナータ著『定動詞語尾論』は11の部分から成る。それらは(i)古ニヤーヤ学派の一般説、(ii)新ニヤーヤ学派の一般説、(iii)ニヤーヤ学説に対するミーマーンサー学派の反論、(iv)ミーマ

ーンサー学派に対するニヤーヤ学派の反論、(v)文法学派の説、(vi)文法学派に対するニヤーヤ学派の反論、(vii)受動文から得られる言語認識についての古ニヤ－ヤ学派説、(viii)受動文から得られる言語認識と行為主体あるいは行為対象を表示する第一次接辞（krt接辞）についての新ニヤーヤ学派説、(ix)ミーマーンサー学派マンダナ・ミシュラ学系の見解、(x)マンダナ・ミシュラ学系への新ニヤーヤ学派による反論、(xi)ミーマーンサー学派プラバーカラ派の見解と新ニヤーヤ学派による反論、である。本研究に着手する前に、第６部分までのテキスト校訂、英訳、解説を終えていた。これは全体の４割弱である。

(2)　本研究初年度（2018年度）には第７部分を扱った。この部分で紹介される「古ニヤーヤ説」は、ラグナータに先行する新ニヤーヤ学派のガンゲーシャ（14世紀）の主張に極めて近いことを突き止めた。ラグナータが使用する「古ニヤ－ヤ」という語は必ずしも新ニヤーヤ学派以前のニヤーヤを指すとは限らない。つまり、ラグナータにとって「古」「新」という表現は相対的なものである。その結果、現代の研究者が了解している「11～12世紀以前のニヤーヤ学派は『古ニヤーヤ』で、それ以降は『新ニヤーヤ』」という立場で用いられる「古ニヤーヤ」「新ニヤーヤ」は、研究者が用いる操作概念と理解すべきであることを明らかにした。

　新ニヤーヤ学派内部における違いは、先行研究が十分でないだけに、これまでほとんど注目されることはなかった。第７部分の分析は、それ以降の部分に現れると予想されるガンゲーシャとラグナータの違いを先取りしており、新ニヤーヤ学派の発展（変容）形態の解明に大きな貢献をした。（2019年発表論文参照。）

(3)　本研究２年目（2019年度）は、最も大部の第８部分「受動文から得られる言語認識と行為主体あるいは行為対象を表示する第一次接辞（kṛt接辞）についての新ニヤーヤ学派説」のテキスト校訂を、４本の刊本を使って行い、英訳・解説を作成した。この部分では、ラグナータは最終回答を示す徴表（マーカー）を使用せずして最終回答を提示している場合があることが判明した。彼は第４部分において定動詞語尾の意味は「努力」すなわち「決意」と結論したが、この意味は能動態語尾に限られるのか受動態語尾の意味でもあるのかが不明であった。第８部分ではこの意味が受動態語尾にも有効であることを主張する。続く第９部分～11部分において、この主張を否定する見解を彼は示していない。

　ラグナータの議論形式はガンゲーシャのそれに比べて分かりにくく、彼の最終回答を見出すのは困難である。しかし、第１～７部分と第８部分を比較することによって、前者で主張された見解が後者において否定されなければ、ラグナータの見解と見なせる事が判明した。言い換えると、前の部分での議論が全て否定されて後の部分の議論が展開されるわけではないのである。この作業によって、ラグナータはガンゲーシャの結論を修正したことや、ガンゲーシャが議論しなかった第一次接辞（kṛt接辞）の意味論を展開したことも明らかとなった。
（2020 年発表論文参照。）

(4)　本研究の３年目（2020年度）の最終年度では、残りの３部分の校訂テキストと英訳・解説を行った。３部分とは、第９部分「ミーマーンサー学派マンダナ・ミシュラ学系の見解」、第10部分「マンダナ・ミシュラ学系への新ニヤーヤ学派による反論」、第11部分「ミーマーンサー学派プラバーカラ派の見解と新ニヤーヤ学派による反論」である。

　ラグナータは、第９部分でマンダナ・ミシュラ学系（「マンダナ学系」と略称）の見解を詳細に紹介し、第10部分で動詞語根の意味と定動詞語尾の意味（特に時制）の関係のみに注目して、マンダナ学系の結論を否定する。ところが、第９部分では動詞語根と定動詞語尾の関係のみが議論されているわけではなく、格語尾や現在分詞の意味についても議論されている。ラグナータはこれらの意味については『定動詞語尾論』の中では議論していないので、マンダナ学系の見解を肯定するのか否定するのかは判明しなかった。第11部分でも、プラバーカラ派の見解を紹介し、動詞語根と定動詞語尾の関係のみに注目して、その見解を否定する。ラグナータが第９部分と第11部分で２つの見解を否定する根拠が、動詞語根の意味と定動詞語尾の意味（特に時制）の関係であることから、彼にとってこの関係が彼の理論を支える最も根本的なものであると結論づけられよう。（2021年発表論文参照。）

(5)　本研究の目的であるラグナータ著『定動詞語尾論』全体のテキスト校訂とその英訳・解説を完成させた。これによって次の点が明らかになった。ラグナータは、定動詞語尾の意味の数をガンゲーシャより減らし、これによって動詞語根と定動詞語尾の関係も捉え直して、自説の合理性を主張した。つまり、定動詞語尾の意味の数についての論理的簡潔性を最も重要だと考えていたと思われる。

(6)　ガンゲーシャ著『真理宝珠』「定動詞語尾章」に基づいて、定動詞語尾の意味や語意を決定する一般原則について解明した旧２論文を改稿し、他の論攷と合わせて単行本として出版した。この改稿は、ラグナータの見解との比較にとって重要である。（2020年図書参照。）この単行本を元にラグナータ説との比較を行って海外の記念論集に寄稿したが、この記念論集が未だ公刊されていない。

＜引用文献＞

① Wada Toshihiro, A Navya-nyāya Presupposition in Determining the Meaning of Words, *Acta Asiatica: Bulletin of the Institute of Eastern Culture,* 90*:* Word and Meaning in Indian Philosophy, edited by Hattori Masaaki, 2006, 71–91.

② Wada Toshihiro, Gaṅgeśa's Theory on the Meaning of Verbal Suffixes (*ākhyāta*), *Nagoya Studies in Indian Culture and Buddhism: Saṃbhāṣā,* 31 (Special Issue for Papers Presented at the 15th World Sanskrit Conference edited by Kamaleswar Bhattacharya), 2014, 61–75.

③ Wada Toshihiro, The 'Discourse on Verbal Suffixes' (*Ākhyātavāda*) of Raghunātha Śiromaṇi (1), *Nagoya Studies in Indian Culture and Buddhism: Saṃbhāṣā,* 32, 2015, 35–45.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 Toshihiro Wada	４．巻 37
２．論文標題 The ‘Discourse on Verbal Suffixes’ (Akhyatavada) of Raghunatha Siromani (6)	５．発行年 2021年
３．雑誌名 Nagoya Studies in Indian Culture and Buddhism: Sambhasa	６．最初と最後の頁 43-71
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Toshihiro Wada	４．巻 36
２．論文標題 The ‘Discourse on Verbal Suffixes’ (Akhyatavada) of Raghunatha Siromani (5)	５．発行年 2020年
３．雑誌名 Nagoya Studies in Indian Culture and Buddhism: Sambhasa	６．最初と最後の頁 1-38
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Toshihiro Wada	４．巻 35
２．論文標題 The "Discourse on Verbal Suffixes" (Akhyatavada) of Raghunatha Siromani (4)	５．発行年 2019年
３．雑誌名 Nagoya Studies in Indian Culture and Buddhism: Sambhasa	６．最初と最後の頁 99-119
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計0件

〔図書〕　計1件

１．著者名 Toshihiro Wada	４．発行年 2020年
２．出版社 D. K. Printworld	５．総ページ数 x+116
３．書名 Navya-Nyaya Philosophy of Language	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関